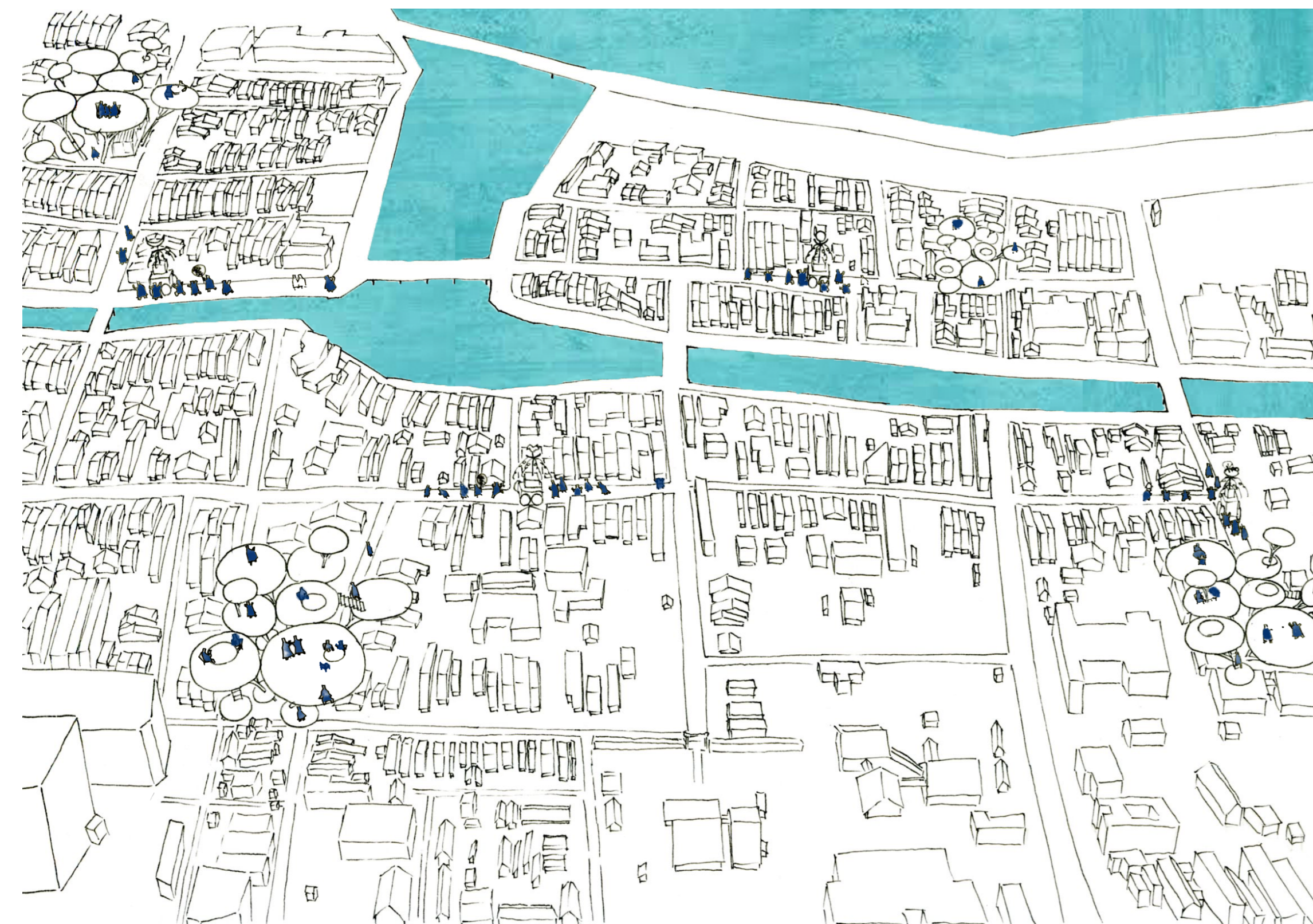


# いにしな 祭りに誘われて

一歴史ある町における防災の在り方一



## background

**津波**  
津波は海に近い町であればどこでも起こりうる災害である。その津波から避難するためには高く堅固な建物ができるだけ近くに必要である。しかしまちによってはそのような建物を建てることでまちが持つ歴史や景観を損なうおそれがある。また津波はたいてい何十年、何百年に一度の間隔でしか来ない。そのため津波の記憶は継承されず避難に対する意識は薄れていき、避難経路が設定されていても覚えていない。

**曳山祭り**  
古くから毎年行われている地域に根付いた伝統行事の一つ。曳山祭りには山車という車輪の付いた大きな依り代がありそれを保管する倉庫がある。

津波防災の課題を「曳山祭り」をとおして解決することを考える

## site

**対象地域**  
富山県射水市新湊地区  
日本海に面した港町で長屋の家々が並ぶ街並みをおこす。  
新湊曳山祭りが毎年行われ、11の各町に山車がある。

**新湊曳山祭りについて**  
江戸時代中期より続く放生津八幡宮の秋季例大祭。新湊の曳山は高さ約8m、長さ約7mで地車に鉾柱を立て花傘をつけた花鉾山車である。この曳山には薬山行事によって海より迎えられた神様が宿り、全部で11基ある曳山が港町である新湊の市街地を、法被姿の若衆によって曳きまわされる。まちの人は曳山をおして海からの恵みを感謝し、海が平穏であることを神様に祈る。



## program



一般的に避難施設として使用されるのは、学校のような高く広い建物である。しかし今回の敷地でそのような建物を建ててしまえば歴史あるまちなみの景観を壊すことになる。そこで各町にある11の曳山の倉庫を津波が起きた際の一時避難のための施設として提案する。11の倉庫は新湊地区一帯に点在しているため、どの家からも5分以内に避難することができる。

5分間で避難可能な距離 約300m  
(群衆歩行・老人自由歩行・地理不案内者歩行による目安)



また各倉庫は曳山の巡行ルート上に位置しているため主となる避難経路を巡行ルートと重ね合わせることで、避難する際に毎年曳山が練り歩いている道をたどって施設に逃げるができる。

**意味としての「祭り」「防災」**

この祭りは海より来たる神様への信仰のカタチである。人は何か自分の身に災いが生じると神様にお祈りし、そこから助かると神様のおかげであったと信じる。津波の際、山車の巡る道を逃げ道とし、曳山の倉庫にすがる。そして命を救われる。防災は信仰と一体となり津波の記憶は祭りを媒体に継承されていく。

## section



## state

現在の曳山倉庫

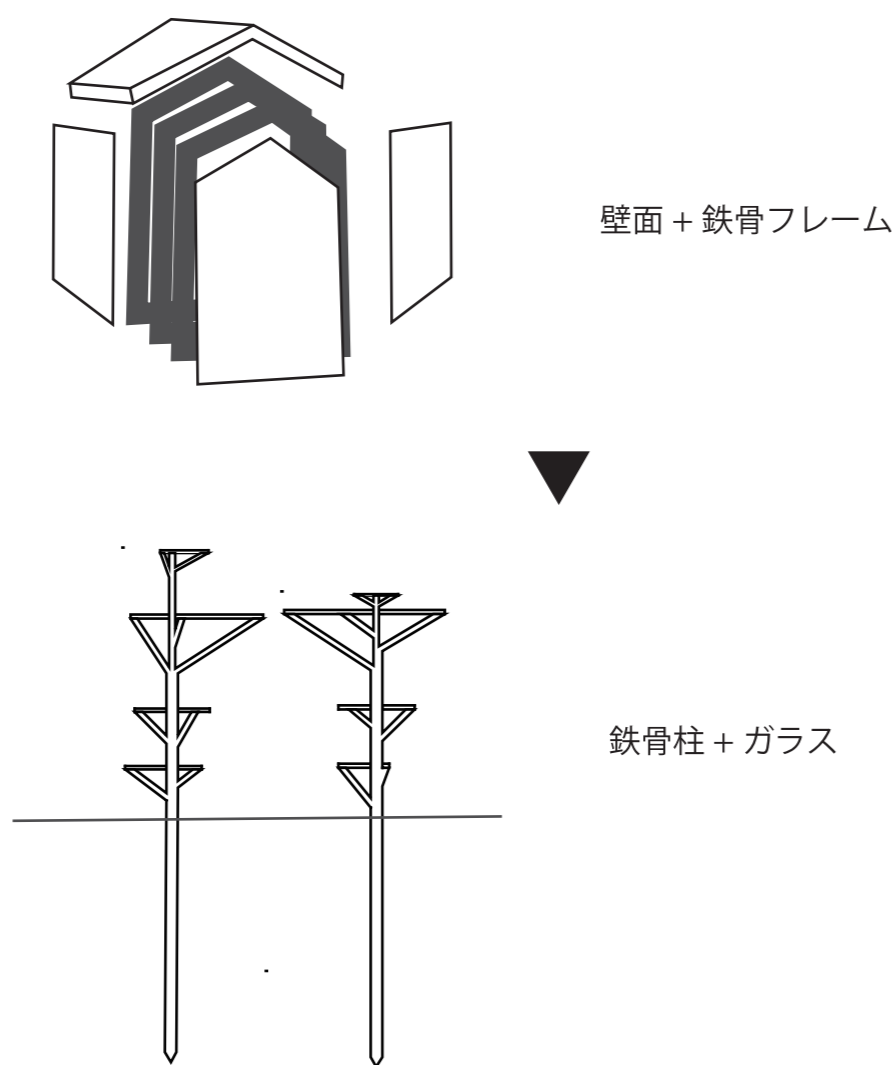


・内部は鉄骨のフレームで仮設の足場のような印象。外は漆喰塗の蔵に似せた壁で覆ってまちと合わせるために内側を隠そうとしている。もっと別の方法でまちに溶けこませることはできないか。

・高さは避難するに十分だが壁面が多く波が来た時に受ける抵抗が大きいため壊れる可能性が高い。

新湊にある曳山倉庫は神社・公民館と併設している。そこで蔵として見せるのではなく神社の境内の木々の中に曳山が守られているような倉庫とすることで、景観としてまちに溶けこみつつ公民館の機能も外へ広がっていくようなエリアを設計する。

## structure



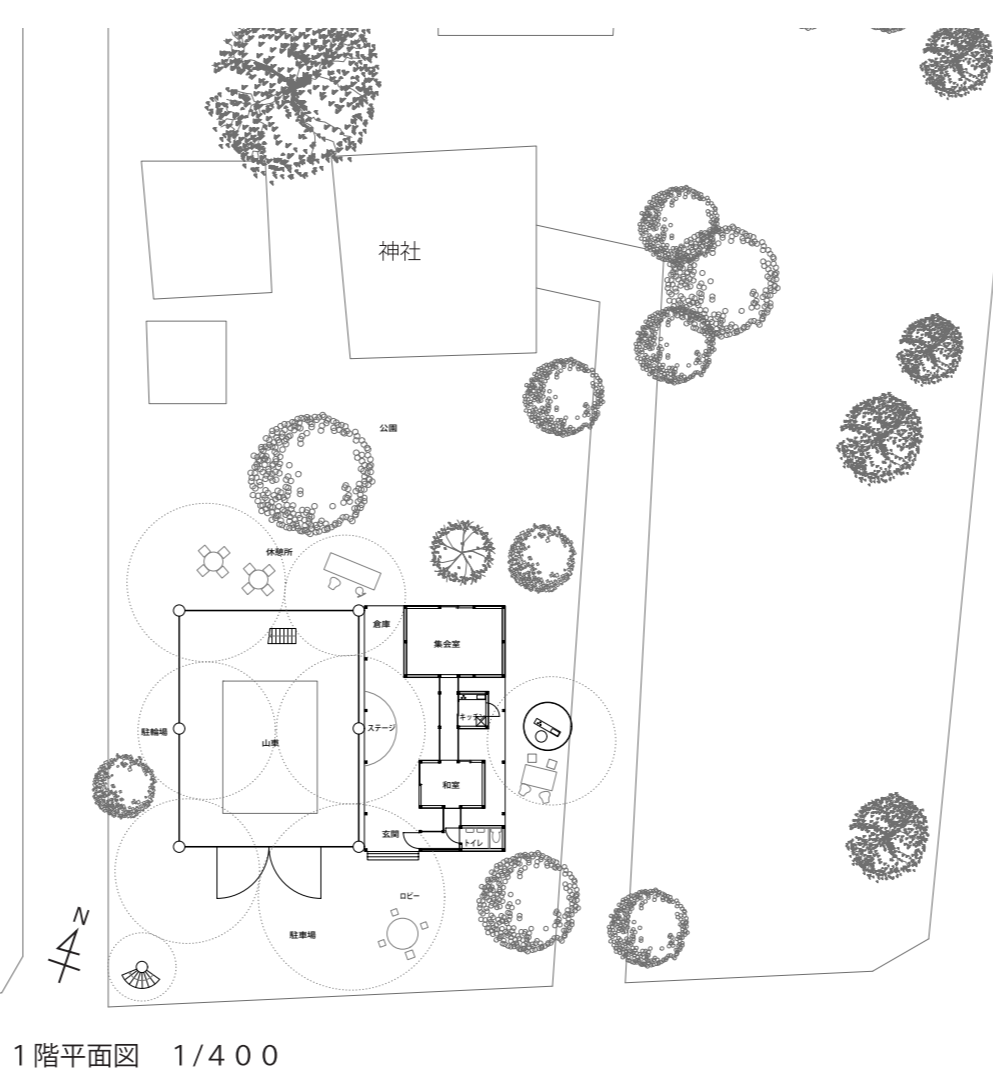
倉庫の壁を取り払い、柱をΦ600鋼管杭にかえることで柱に構造を担わせる。壁面はガラスとし津波が来た場合には壁は流され柱だけが残る。日常時はギャラリーとなり観光に来た人が魅力を感じる倉庫になる。

## plan

必要な機能

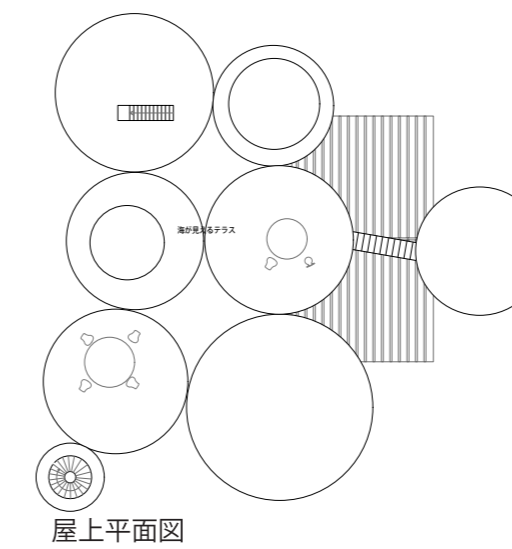
1倉庫あたり避難人数 400人 (対象地区の人口4,441人に対し倉庫の数11)

避難に必要な高さ 建物の高さ6m以上の部分

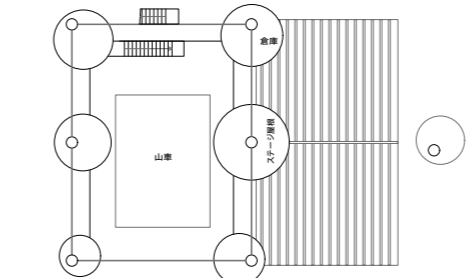


1階平面図 1/400

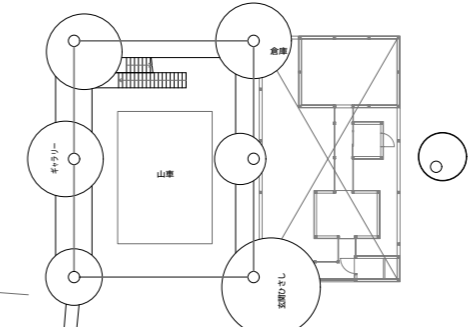
円形のスラブは避難に必要な広さの分だけ広がっていく。スラブはまた屋根となり人々の活動の場を広げていく。



屋上平面図



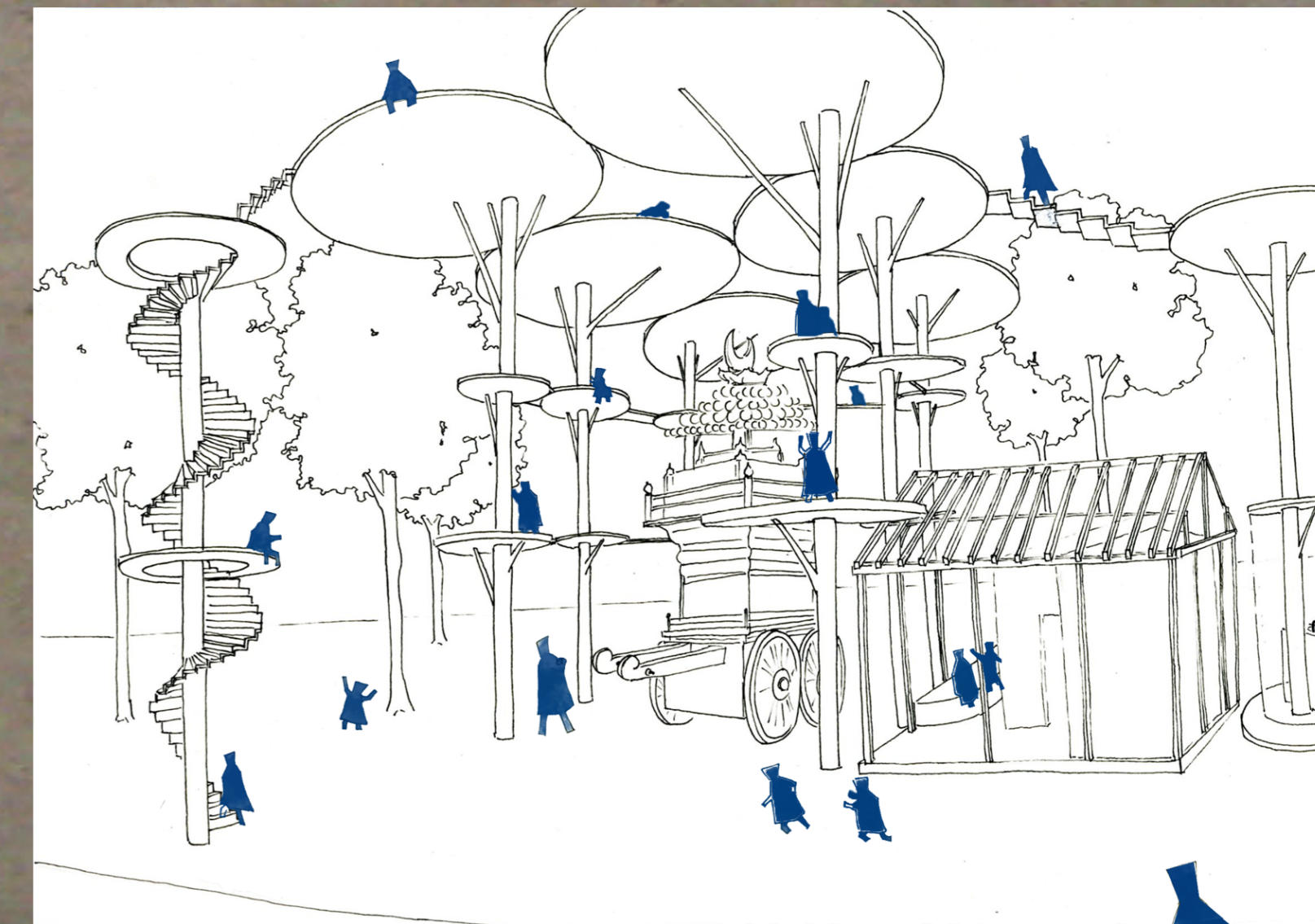
3階平面図



2階平面図



▲ 屋上にとると海が見える



▲ 木々に溶け込む施設。公民館は解体されていき人々の活動は外へ広がっていく。